九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『こどもたちのライフハザード』　瀧井宏臣　著

石橋, 孝明
東和大学

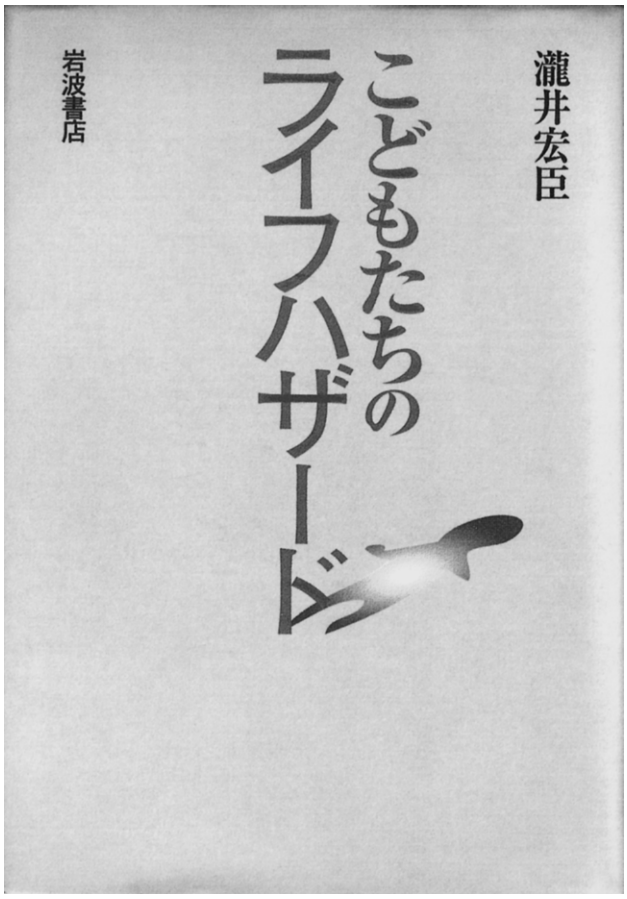
https://doi.org/10.15017/9067

出版情報：生活体験学習研究. 5, pp.93-95, 2005-01-28. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

日本生活体験学習学会誌　第５号　93―95（2005）

『こどもたちのライフハザード』

瀧　井　宏　臣　著



今、こどもたちが危ない。生活過程のなかで基本的な型を教えられていないこどもたちは、人との交わり、集団生活のなかで、振る舞うべき正しいかたちが分からなくなっており、自己中心的な行動をとってしまう。いわゆる、モラルハザード状況を呈しており、人として振る舞うべき基本的な生活の型を教え込む必要がある。それは、日常生活のなかで、生活習慣として教え込まれなければならない。と、言われて久しい。そのための対策もいろいろ論じられている。

『こどもたちのライフハザード』という著書もこのような主張を新たな観点から論じたもののひとつである、と予想されるかもしれない。しかし、タイトルにあるように、「ライフハザード」である。いまや、モラルどころの話ではなく、モラルを形成し、それを含む生活そのものが破綻している、と著者は語りかけようとしているのである。

そもそも、著者がこどもたちの生活の危機的状況を実感するのは、著者自身の実体験に基づく。重度のアトピーに患う自分のこどもを育てていく過程で、多くのこどもたちが著者自身のこどもイメージと大きく異なっていたからであった。「笑い声をあげて広場を駆け回る」というこどもの姿はなく、「無表情で笑わない子。いかにも疲れた様子でボンヤリした表情の子。イライラしてすぐキレる子」。そして、このようなこどもたちの生活実態は、アトピーを患ってるこどもたちにのみ見られるものではなく、東京、山の手のこどもたちも同じであった。

なぜ、こどもたちはこのように生気がないのか。すぐに著者が思い浮かべた理由は次のようなものだった。「豊かな国だから逆にこどもたちに生気がないのではないか。生活のすべてが便利で快適になっただけでなく、そもそも貧困や飢餓など生存を脅かすような脅威がない。そのことがかえって、こどもたちから生きる意欲を奪い、活気を失わせ、生き物としての感覚を鈍磨させた結果、豊かな表情を奪っているのではないか」。

しかし、著者はもともと、事実を丹念に調査し、それに基づいて物事を判断するというルポライターである。そこで、その理由は本当にそうか、原因を探っていく。

最初の調査に基づいて著者は、「ライフハザード仮説」をたてる。つまり、「生活破壊という言葉では言い表せない、もう少しニュアンスの違う生活の崩れが起きている」というのである（「乳幼児たちのライフハザード」『世界』2000年５月号）。

そして、この「ライフハザード仮説」検証のため、本格的な取材を開始し、「乳幼児の取材を中心に場合によっては思春期のこどもたちまで食指をのばして、そのからだやこころに起きていることの正体をできるかぎり丹念に追う」。その報告が、本書で詳しく展開される。

その結果、ライフハザードといわれる乳幼児たちのからだとこころの異変、並びにその主因が、次のように分析されるのである。

(1)　体力の低下…遊びの消失が主因

⑵　自律神経系の異常（生体リズムの攪乱）…睡眠の変容をメインに遊び、食も絡む
⑶　免疫系の異常（ホモ・アトピンス）…生活環境や食の激変
⑷　内臓・血液系の異常…食がメインで遊びも絡む
⑸　脳の発達不全…環境汚染や化学物質の影響も疑われるが､母子関係の希薄化､遊びの消失とメディア漬け、コミュニティーの崩壊が主因として疑われる

⑴は１章で、⑵は１章、２章で、⑶は５章で、⑷は３章、４章で、⑸は６章、７章、８章、９章、10章で、それぞれ詳細に報告・分析される。

これらこどもたちのからだとこころの異変は、大別すれば、「生活要因」と「成長要因」の変容によって引き起こされているのである。

つまり、「睡眠、食、遊び、メディアといった生活そのもの（生活要因）の変容」、即ち「いきいきラインの変容（歪み）」と「育ちを支える母子関係、家族関係、遊び友だち、地域のコミュニティーといった人間関係の重層構造（成長要因）の崩壊」、即ち「すくすくラインの崩壊（歪み）」によって引き起こされている。そして、前者がからだとこころの異変をもたらし、後者がこころの異変をもたらしている。

こうして、「ライフハザードとは、生活要因と成長要因の双方が崩れつつある危機的な状況」であって、「こどもたちの生活基盤がことごとく崩れている」がゆえにこどもたちに生じている異変である、と言われる。

そして、「すくすくラインの崩壊（歪み）」は、「複雑で多様な関係性の消失とそれに伴う母子関係の歪み」を引き起こしており、それが「キレる、多動、無表情といった幼児期のこどもたちの異変の引き金」になっており、さらに、「学童期における脳の発達不全や思春期以降に激増する不登校、いじめ、ひきこもりといった現象の原因とまでは言わないが、少なくとも温床にはなっている」と分析される。

そしてまた､人間関係の重層構造があるがゆえに「親がなくても子は育つ」といわれていたことが、いまではその揺籃が消失し、「親があっても子は育たず」の時代になってしまった、という深刻な事態の報告がなされる。

では、こどもの未来を守るためにどうすればよいのか、と筆者は問い、その見通しを次のように立てる。

「いきいきライン」、即ち「睡眠、食、遊び、メディア」に関しては、「大人がこどもの文化や世界を尊重し、大人のライフスタイルに巻き込まないこと」である。このうち、睡眠とメディア漬けの問題は、大人のライフスタイルにこどもを巻き込んでいる事実に単に気づいていないだけなので、何とかなるかもしれない。しかし、食と遊びの問題は難しい。「外食化、食の軽視と簡略化に歯止めをかけ」、また、「家庭に残された食育力をできるだけ維持する施策」、「学校や保育園・幼稚園や地域などで多面的に食育を社会化していく方向」を探る。遊びについては、「プレーパークの試み」がモデルになるだろうし、「ノーテレビ運動」も大切な取り組みである。ともあれ､「こどもにとって大事なことは、よく食べ、よく眠り、よく遊ぶこと」である。このことを大人が思い出し、一刻も早くそのための手を打つことである。

「すくすくライン」、即ち「人間関係の重層構造」を再生することはもはや不可能である。それに変わる新たな揺籃として、地縁でも血縁でもなく､「こども同士が遊び仲間」という子縁をつなげ深めていくことである。

以上のような見通しである。そして、就学前のこどもたちに焦点をあてたこの報告は、本質がなかなか見えてこない思春期のこどもたちの問題行動、即ち「キレる」「暴れる」「無気力」「不登校」「ひきこもり」といった問題行動の大本を、同時に浮き彫りにしてくれていたのである。これは深刻な事態の報告ではあったが、筆者にとっては「ビッグなオマケ」になった。

そして最後に、筆者は、戦後のニッポンが開発という名のもとに豊かな自然環境をことごとく破壊し、いのちを育む農業を放棄したことが、こどもたちの育ちを奪ってしまっていたのだと指摘し、これらに共通する､「いのちの軽視＝いのちの営みをないがしろにする価値観、この国が無批判に受け入れ、膨張させてきた欧米流の世界観」の超克を訴えて、本書を終えている。

このように、筆者は現代のこどもたちのからだとこころの異変を、「ライフハザード」と表現し、こどもたちの事実をつぶさに見ることを通して、読者に分かり

易く報告・分析してくれている。事実は深刻な事態であるが、本書はそれをまず正確に見せてくれている。こどもを一生懸命、真剣に育てていると考えているにしても、基本が間違っていれば、こどもたちに異変が生じる。また、家庭の教育力の低下、それも母子関係の歪み・希薄化が主張されるにしても、それは家庭、母親にのみ責任が帰されることでもない。筆者が「食育の社会化」を提案するように、共働きが定着すればするほど、「保育の社会化＝社会制度の充実」もこれからますます必要になってくるだろう。いずれにせよ、本書はこれからの日本を考えれば考えるほど、ぜひ、一読を薦めたい書物である。

特に、これからこどもを育てていこうとする若い夫婦、そしていま現在子育てに専念している夫婦、さらにこどもの教育に携わっている人たち、この国のかたちを形成していく人々には、ぜひ、一読を薦める。

［岩波書店、2004年、1900円］

（東和大学　石橋　孝明）